

外国語で読むこと、読まれること



鴻巣友季子 氏

1963年東京都出身。翻訳家、文芸評論家。英語圏の現代文学紹介並びに古典文学の新訳に尽力し、原文の味わいを生かしながら読みやすい翻訳文体を確立する。訳書に、クッツェー『恥辱』『イエスの幼子時代』、ミッチェル『風と共に去りぬ』（以上、新潮社）他多数。著書に、『カーヴの隅の本棚』（文藝春秋）、『全身翻訳家』、『翻訳教室 はじめの一步』『翻訳ってなんだろう？ あの名作を訳してみる』（筑摩書房）他多数。

担当者から

皆さんの中で翻訳に興味を持っている方は多いではないでしょうか？翻訳には、適切な訳語を見つけられなかったり、作家が表現したいこととニュアンスが違ったり、という難しさがあると思います。講演を通して、作家と翻訳家の二つの立場から生の声を聞いてみましょう！

公開講座「総合2018」

漕ぎ出せ未来へ

フレキシブルな心のコンパスを携えて一

第20回 11月22日（木）

13：00～14：30

@津田塾大学特別教室

今回は国際文芸フェスティバルTOKYOとの共催です

(<http://ifltokyo.jp/2018/11/22/626/>)

平野啓一郎 氏

1975（昭和50）年、愛知県生れ。京都大学法学部卒。1999（平成11）年、大学在学中に文芸誌「新潮」に投稿した『日蝕』により芥川賞を受賞。著書に『日蝕・一月物語』『文明の憂鬱』、『葬送』（第一部・第二部）、『高瀬川』、『滴り落ちる時計たちの波紋』『あなたが、いなかった、あなた』、『決壊』（上・下）、『ドーン』、『かたちだけの愛』、『空白を満たしなさい』、『透明な迷宮』、『マチネの終わりに』などがある。

講演内容

文筆家にとって外国語とはどのような存在か？国際的な作家として外国語に触れる機会も多い平野啓一郎氏に、読書体験、海外で自作が翻訳され多言語で読まれることや各種文芸フェスティバル参加などの経験談を交え、異言語が創作やキャリアにどう関係してきたかを、翻訳について探求しつづける翻訳家の鴻巣友季子氏がお聞きします。